

【研究テーマ】

『学び合い,語り,つながる生徒の育成』 ～仲間とともに主体的に高め合う活動を通して～

米子市立尚徳中学校

スーパーバイザー:

学びの共同体研究会かわち学座(元東大阪市立金岡中学校長)馬場 宏明 先生

1 はじめに

本校は,米子市の南に位置し周囲に田畑が広がる生徒数286人(男子163人 女子123人)の学校である。本校の生徒は,明るく素直であり,行事や生徒会活動に対する取り組みにおいても,自主性や積極性を発揮し,友達と協力して活発に活動している。しかし一方で,自分の考えや思いを相手に伝えたりすることが苦手な生徒も多く,中学校に入学してから新しい人間関係をうまく構築できずにいる生徒もいる。また,厳しい生活環境のため自尊感情が育っていない生徒もおり,自分や他者を大切にすることができずに不登校や問題行動という形でそのストレスを表面化させる場合もある。学習面においては,全体的には落ち着いた態度で学習を行っている。しかし,与えられた課題には一生懸命取り組むが,自ら進んで主体的に学習に取り組む姿勢は,まだ十分に育まれていない。また,学習意欲や基礎学力の低さのため学びから逃げる生徒もおり,学力不振が不登校のきっかけになる場合もある。学習内容を理解したいと思っても,その方法がわからずに困っている生徒もいる。

2 研究の方向性

生徒の実態および本校の課題から,個々の生徒の自尊感情や人間関係構築力,基礎学力や主体的に学ぶ力を高める必要がある。そのためには,生徒と教師の関係を中心とした教育活動だけではなく,生徒同士のかかわり合いが重要になる。なぜなら,自尊感情は,自己と他者とのかかわり合いの中で自分をかけがえのない存在として認識することにより育まれるものだからである。また,学習においても,友達と一緒に学び合うことで学ぶ楽しさを感じるとともに,わからないことを友だちに聴くことにより学習内容がわかる喜びも感じることができる。教える側の生徒にとっても,友達の学習の役に立つことで学習意欲も高まり,人に説明することで学習内容の理解も増し,学力の向上に期待ができる。したがって,教科学習はもちろんのこと,さまざまな教育活動において,仲間とともに主体的に学び合い高め合う活動を取り入れていく。そして,仲間と楽しく安心のできる,充実感や達成感のある生活や学習をすることで,不登校や問題行動の解消につなげる。また,これらのことは中学校だけの問題ではなく,小学校段階から起因する場合も多くあるため,校区の各小学校と連携しながら義務教育9年間を見通した教育活動を行う。つまり,中学校区の連携を図りながら,「仲間とともに主体的に高め合う活動を通して,学び合い,語り,つながる生徒の育成」につとめ,生徒にとって「魅力ある学校づくり」をめざしていく。

3 研究構造図

| | |
|------------------------|--|
| <p>生徒の実態 本校の課題</p> | <p>○自分の思いを伝えることが苦手なため人間関係をうまく築けない。 (自尊感情が育っていないため自他ともに大切にできない。)</p> <p>○学習意欲や基礎学力の低さにより学びから逃げる生徒がいる。 (自ら進んで主体的に学習に取り組む姿勢に欠ける。)</p> |
|------------------------|--|



| | | | |
|--|--|---|--|
| <p>仲間とともに… 共に活動する楽しさ,安心感。仲間の役に立つ有用感(自尊感情)</p> <p>主体的に… 課題意識や興味を持って自ら進んで行う楽しさ。(受け身的でなく)</p> <p>高め合う活動… 学び合い,語り合い,協力して活動することで,充実感や達成感を 感じるとともに,自己の成長を実感する喜び 仲間とつながる喜び</p> | | | |
| <p>①人権教育を 基盤とした仲間づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会的立場を深め,思いを伝え合う人権学習の推進 ・ほめ合い認め合う場の設定(終わりの会) ・自尊感情アンケートの分析・活用と教育相談の実施 | <p>②「学び合い」のある 学習活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎学力の定着と学習に対する関心・意欲の喚起 ・「学び合い」のある学習活動の充実 ・目標を立て,計画的に取り組む家庭学習の習慣化 | <p>③生徒会活動, 地域交流や体験活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒会を中心とした自尊感情を育む縦割り活動 ・地域の方と一緒にを行う体験活動 ・校区内にある保育園との交流活動 | <p>④小中連携の強化 (児童生徒の交流)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4校合同交流会(新入生説明会) ・あいさつ運動 ・部活動交流 ・特別支援学級交流会 ・家庭と連携したメディアコントロールデーの実施 |
| <p>人権学習部 (人権が尊重される人間関係づくり)</p> | <p>学力向上部 (人権が尊重される学習活動づくり)</p> | <p>生徒指導部 (人権が尊重される環境づくり)</p> | |



| | | |
|------------------|--|--|
| <p>生徒につけたい力</p> | <p>人権学習</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・確かな人権感覚,自他のよさに気づき大切に作る心 ・人間関係構築力(仲間とつながる力),社会性,思いを伝え合う力 |
| | <p>学力向上</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な知識・技能,思考力・判断力・表現力,主体的に学ぶ態度 ・目標に向かって計画的に努力する態度,家庭学習の習慣,学習規律 |
| | <p>生徒指導</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・仲間とともに課題解決へ向けて主体的に行動する力 ・地域の一員としての自覚,家庭・学校・地域を愛し,大切に作る心 |
| <p>めざす生徒像</p> | <p>「学び合い,語り,つながる生徒」</p> | |
| <p>魅力ある学校づくり</p> | <p>「心の居場所」となる学校づくり(教師がつくる)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒が安心できる,自己存在感や充実感を感じられる場所 <p>「絆づくりの場」となる学校づくり(生徒がつくる)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師や友人との心の結び付きや信頼感を感じられる場所 ・人とかかわる喜びを感じられる場所 | |

4 研究内容（学力向上部の取組）

（1）部会のねらい

本校ではここ9年間、「学びの共同体」の理論・手法を取り入れて、仲間とともに「学び合う」ことのできる授業づくりを進めてきた。仲間との「学び合う」授業は、分からない生徒にとっては、学ぶ楽しさを感じることができ、わからないことを仲間に聴くことにより学習内容がわかる喜びも感じることができる授業となる。また、聴かれた側の生徒にとっても、相手に教えるという仲間への役立ち感が学習意欲につながる授業、相手に説明することによる学習内容への理解が深まり、学力向上が期待できる授業となる。

（2）学力面における課題と対策

本校の学力面における課題として、自分の学習、成績に自信のない生徒が多いこと、自尊感情が低いことに着目し、「一人一人を大切にすること」という視点と「互いに支え合う集団づくり」の視点を持つことが大切だと考えた。学力を身につけ、お互いにつながり合い、支え合い、高め合う関係を築くために、「学び合い」の中でつながる質的に高い課題の創意・工夫に努めた。

また、学力を身につけさせることは、そのこと自体が生徒の自信や自己肯定感につながるだけでなく、自分の思いや考えを自信をもって表現したり、相手の思いや考えを受け止めたりすることができる力につながると考えた。

（3）取組の実際

① 仲間とともに主体的に学び合う学習活動（研究授業実践）

本校教員が年間1回以上の研究授業を行い、事後の研究協議を実施するように計画を立てた。授業研究会の年間計画の中で、スーパーバイザーの馬場先生には、5月と1月に実施する校内授業研究会に指導助言者として直接指導を受ける機会を設定した。学びの共同体理論に基づいた授業実践を始めて、9年目を迎えるが、毎年異動もあるため、この理論に初めてふれる教員はもちろん全教員が毎年新たに学び直すことの継続をしていくことが必要である。

また、授業研究会を実施する際には校区の小学校にも案内を出し、小学校の先生にも参観していただくことで、中学校の取組の理解と忌憚のない意見交換の機会となった。

授業においては、A4の授業デザインの様式を採用し、次の3点を授業デザインの中に取り入れている。必然的に授業参観者の授業を見る視点もそれがポイントになる。

【授業づくりの視点】

「学びの共同体づくり」の理論・方法を取り入れ、仲間とともに主体的に高め合う活動を通して、「学び合い、語り、つながる生徒の育成」をめざした学習活動の展開

○学習のめあて・流れについて…本時の学習のめあてが明示され、生徒に学習の流れが伝わる効果的な導入

○課題設定について…生徒が主体的に学び、学習（教科）のねらいを達成するための「学ぶ値打ちのある課題」の設定

・「共有の課題」（基礎・基本、知識・理解、技能）は、きちんと共有がはかられているか。

・「ジャンプ課題」（応用・発展、思考力・判断力・表現力）は、生徒をつなぐ課題か。

○学び合いについて…個々の生徒の学び(活動)や,生徒同士の学び合い(班・全体)が成立するための手立てや工夫

- ・「共有の課題」における班活動…個人作業の協同化,わからないときに聴くグループ学習
- ・「ジャンプ課題」における班活動…他者の意見を聞き,自分の考えを深め広げる姿・発言をうむための聴く,つなぐ,戻す,の工夫
- ・全体学習(コの字隊型)…表現の共有,生徒が互いの意見を聴き合い,意見をつなぐ場面の手立て



② 計画的に取り組む家庭学習の習慣化

教科及び学年ごとに家庭学習を促すような取組を行い,生徒自身が自主的に家庭学習に取り組むことをめざす。

- ・教科→原則毎時間宿題を出す。 ・学年→週末課題などの計画的定期的な宿題
- ・家庭学習の手引きの有効活用→入学・進級時の配布と指導,見える化,家庭学習の状況把握
- ・新入生→春休みの課題(算数・漢字)を出し,休み明けにテストの実施

③ 中学校区共通の取組:学習規律の重点化

平成28年度末から次の3点について校区共通で取り組んでいる。

- ・授業の準備をしてチャイム着席を守ること
- ・名前を呼ばれたらはっきりと返事をする
- ・話す人の方を向いて(うなずきながら最後まで静かに)話を聴くこと ※()内は上位目標

学 び 合 い の ル ー ル

- 第1段階 ① 自分の力で取り組んだり、一生懸命考えたりする。
(共有) ② 考えてもわからないときは「教えて」と言う。
③ 「教えて」と言われたらわかるまででいいに教える。
(答えではなく、問題の意味や解き方、理由などを教える。)
- 第2段階 ④ 課題に対して、自分の考えや意見をもつ。
(ジャンプ) ⑤ 意見を交流する。(自分の考えを話す。相手の意見を聞く。)
友達の意見をよく聞いて、自分の考えとくらべる。
- 第3段階 ⑥ 考えたことを進んで発表し、クラス全員で学びを深める。
(コの字) ⑦ 自分の考えをまとめる。(自分の考えを深め広げる。)

学 習 の き ま り

- ① 授業の準備をして、チャイム着席をまもろう。
- ② 「お願いします」「ありがとうございました」を大きな声で言おう。
- ③ 相手を見て、うなずきながら、最後まで静かに集中して聞こう。
- ④ 相手にわかりやすく、大きな声で最後まではっきりと発言しよう。
(「…です」「…だと思えます」と、発表をしめくくる。)
- ⑤ 友達の発言について、笑ったりからかったりしない。

◎その他、指導上の留意点 (教師用)

- (1) 教室環境を整える。黒板消し、机の整頓(机の横にカバンをかけない)、ゴミ拾いなど。
もし、できていなければ生徒に直させるか教師が直してから授業を始める。
- (2) チャイムとともに授業が始められるようにする。あいさつがきちんとできていなければ、やり直しをする。服装もきちんと整えさせる。欠席者を確認する。
- (3) 学習用具には記名をさせておく。授業に必要な物は机の上に出さない。
- (4) 姿勢を正して顔を上げて話を聞く。よそ見や私語が生まれぬよう課題の提示を、リズム感、速度感をもったものにする。
- (5) 指名されてから発言する。教師も生徒も丁寧な言葉遣いで。「〇〇さん」「△△くん」と呼ぶ。
- (6) 班の隊型になったとき、机をきちんとつけさせる。欠席者の机もつける。
- (7) 席を勝手に離れない。トイレや荷物を取りに行くときなどは、教師の許可を得る。
- (8) チャイムが鳴っても、あいさつが終わるまでは学習用具をしまわせない。
- (9) その時間の学習内容や宿題の有無、次回の準備物等を確認する。
教師は、その時間の生徒の学習状況を評価する。(学級全体または教科係に伝える。)
(生徒の主体性や生徒同士の関わりなど「仲間づくり」の視点に立った内容で。)
- (10) 持ち帰らなくてもよい教科書や教材等については、各学年に確認しておく。

★ 誤った発言を嘲笑するなどの差別的な言動、他の生徒の学習権をおかす言動に対しては、授業をストップしてでもその不当性をただす。(常に人権教育の視点で臨む。)

5 スーパーバイザー 馬場宏明先生による指導助言

- ・平成29年 5月22日(月)研究授業参観 研究協議における指導助言
- ・平成30年 1月29日(月)研究授業参観 研究協議における指導助言

※授業研究会までに、馬場先生に「授業デザイン」をお送りし、事前に助言をいただくようにしている。

○「社会科」の授業への事前指導助言(授業デザインへのアドバイス)

- ・授業のめあてに「なぜかを考える」とあるが、「なぜか？」という問いかけは謎を解く問いかけに使われることが多く、記憶や既知のことに思いをはせる様に向かいます。授業は、未知のことを学ぶ時間です。「なぜか？」という問いかけをするときは、「なぜか？」で終わらないで「なぜか？その原因やきっかけを考えよう」として、歴史上の事実(=教科書や資料)に向かわせて行くことが大事です。
- ・共有課題はとてもいいです。ポイントはこの課題達成のためのワークシート(しかけプリント)。しかけプリントは一斉授業をするときの「板書計画」を基にして、板書計画に空欄をつくって、その空欄を教科書を読みながら埋めさせるようなものがよい。
- ・ジャンプの課題では、質の高い課題に挑戦させる時に、ヒントなどの提示は初めから課題の質を低くするようなものなので、ヒントの提示はしない。
- ・留意点の最後に「予想させる」とあるが、歴史に空想はなくあるのは歴史の事実、事象。よくある「たら」「れば」を思考させることも禁じ手である。

○「理科」の授業への事前指導助言(授業デザインへのアドバイス)

- ・板の四隅の下に四つのコップをおいて、板の上に立つ実験は驚きを覚えさず実験だが、後段の計算方法に結びつかせるのは面積を考えるうえで少し苦しいのでは。
- ・圧力とはどんなものかを感じ取らせ計算に導くには、スポンジと水を入れたペットボトルがいいのではないか。あえてスポンジの上にペットボトルの上下をかえて立たせ、へこみの違いを観察する実験をしてみれば。ペットボトルの底とキャップの面積、ペットボトルの重量を測ると、計算が可能になり数的な違いも捉えることができると思う。
- ・圧力の最初で、どう学び取らせていくか、実験は演示にとどめておいて、ワークシートの工夫で学び取らせる方法もある。この場合は、ワークシートをどう作るかが大切。一斉授業では板書計画を作成します。それを作成して、その板書計画に空欄をつくり、その空欄を、教科書を読んで埋めさせる方法があるが、この方法は理科の授業すべてに適用できる。

1年〇組 理科授業デザイン

1. 単元名 力による現象
2. 単元の目標 日常生活を通して形成した固有の概念に対して、観察や実験を通して規則性を見出したり、事実をつきつめて解決することで、望ましい科学概念を形成できるようになる。
3. 単元の指導計画(全11時間,本時 7/11)
 - 第1次 力のはたらき(2時間)
 - 第2次 力のはかり方(3時間)
 - 第3次 力の表し方(1時間)
 - 第4次 面に加わる力のはたらき(2時間 本時1/2)
 - 第5次 水中の物体にはたらく力(2時間)
 - 第6次 空気中の物体にはたらく力(1時間)
4. 本時の目標 大きな力でも、受ける面積が異なると力のはたらきも変わってしまうことに気づくことができるようになる。
5. 本時の学習過程

| 学習活動 | 形態 | ○指導上の留意点, ☆評価規準【観点】 |
|---|------------|---|
| 1. 本時のめあてを確認する。 | 一斉 | |
| めあて: 面に加わる力のはたらきを知り、「ある筆箱」をもと計算にチャレンジしよう。 | | |
| 2. 共有の課題に取り組む。 | | 課題: 剣山に風船を指しても割れないことから、圧力について知ろう。 |
| 3. 全体で確認し, 共有する。 | 学習班 | ○単位に気を付けさせながら問題を解けるようにする。 ☆圧力の計算を理解し, 解くことはができる。 【自然事象についての知識・理解】 |
| 4. ジャンプ課題に取り組む。 | | 課題: 「アーム筆箱」をもとに、ゾウと人間からはたらく圧力について計算しよう。 |
| 5. 全体で確認し, 共有する。 | 学習班 コの字 | ○体重は重力のはたらいている重さなのでkgではなくNで表すように促す。 ☆自分で考えた圧力の計算方法を説明することができる。 【科学的な思考・表現】 |
| 6. 振り返りとまとめをする。 | コの字 | |

○「理科」の授業への事後指導

- ・理科の悩みは、授業に興味を持たせること、今回はつかみが良かった。
剣山、画鋏を使ったのが良かった。これをどう処理するのがポイント。
授業者が剣山と画鋏の図を使って説明をしてしまったのが良くない。どこがどう違うのかを生徒に考えさせるべきだった。剣山と画鋏を面積に結びつけるのが難しい。スキーの図を使って説明をした方がわかりやすかった。
- ・圧力の計算に持っていくのに、ワークシートを使って教科書の内容を書かせる流れに持っていく手立ては良かった。学習班にすぐなれるのが良かった。
- ・生徒が「教えて。」と言うまで誰も関わってはいけない。困っている生徒がいても安易に手助けをしてはいけない。このグループ学習は、困っている生徒、わからない生徒が「教えて。」と言うまで教えてはいけない。これが、主体的な学びにつながる第一歩である。
- ・考えさせるということについては、とてもいい課題だが、説明が必要になる。過去130年間、授業の研究は先生が説明を上手に出来るかに特化されてきた。しかし、先生が説明するより生徒が説明した方がわかりやすい。説明する生徒は、説明することによって理解が深まるし、説明される生徒は同僚の言葉なので寄り理解できるようになる。



○共同的な学習を支えるケア

【子どもの人権を尊重する】

- ・子どもの話をよく聴く、生活を知る
- ・頭ごなしに怒鳴らない
「説得と納得」「考えさせる」指導
- ・みんなの前で恥をかかさない
個別に注意・叱る
- ・平等に対応する
見過ごすことは見捨てることになる

【授業の観点(教師のチェックポイント)】

- ・声のトーンをさげて生徒の心に届けているか
- ・誰も一人にしない、誰も見捨てていないか

- ・一人残らず授業に参加しているか
- ・安心できているか　・夢中になっているか
- ・訊き聴き合いができていますか
- ・学びと学び合いがあるか
- ・質的に高い課題であるか・・・

6 研究のまとめ

(1) 成果

【生徒にとっての成果】

- 本校が実施する「学習状況アンケート」の、【授業の中の学びによって「わかった」「できた」「力がついた」と感じることはありますか。】の問いに対して、概ね90%の生徒が肯定的評価をしている。
- 【授業でわからないことがあると、友達や先生に聴くことができますか。】の問いに対しても概ね90%の生徒が肯定的評価をしている。

学びの共同体理論に基づいた生徒同士の学び合いのある授業実践が定着した成果だと考える。

【教師にとっての成果】

- 馬場先生から直接指導をいただくことで指導のスキルアップや改善に直結する貴重な機会となっている。
- 馬場先生には授業デザインの作成段階からかかわっていただき、メールでやりとりする中で、先生からの助言をいかして授業デザインの改善をおこなったり、授業のポイントをおさえていただいたりしている。それにより、「質的に高い課題」への検討ができた。

(2) 課題

- 平成29年度の全国学力・学習状況調査の結果では、国語、数学ともA問題、B問題では3ポイント以上回る領域があった。個々の生徒の学力をさらに向上させる手立てが必要である。そのためには、[共有課題][ジャンプ課題]が学ぶべき価値のある課題設定になっているのかの吟味が必要である。
- 毎年教職員の人事異動もあるため、この理論に初めてふれる教員はもちろん全教員が毎年新たに学び直すことの継続をしていくことが必要である。
- 「主体的・対話的で深い学び」と「協同的な学び」との関係性の研究を推進していく必要がある。

7 おわりに

馬場宏明先生に指導していただいて9年目を迎えたわけであるが、毎年的人事異動で教師が入れ替わる中で、スーパーバイザーは非常に大きな存在であり、7年間積み上げていくことができた要因の大きな要素であると考えます。学びの共同体理論に基づいた協同的な学びの実践を今後も継続していき、「わからないと言える生徒とその人間関係づくり」「教え合いではなく学び合いのある授業づくり」を進めていきたいと考えています。

8 参考資料(学び合いのある授業づくり)

本校が実践している学びの共同体理論に基づく学び合いのある授業づくりについては昨年度の報告に掲載。